

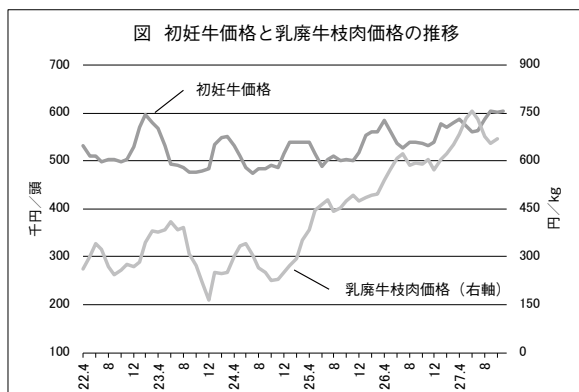
TOPICS  
2トピックス…②  
乳用牛価格高騰の影響

近年、乳用牛価格の動向が酪農関係者の注目を集めている。平成27年12月17日に開催されたホクレン十勝地区家畜市場では、ホルスタイン種初妊牛の平均価格が70万円の大台を突破し、過去最高値を記録した。また、乳廃牛価格も高水準で推移し、平成27年初頭から枝肉1kg当たり600円台を維持している。このような乳用牛価格をめぐる情勢の変化は、酪農経営にどのような影響を及ぼしているのだろうか。

乳用初妊牛の市場取引価格は、春産みが出回り始める12月に上昇を始め、翌年の春にピークを迎え、その後下降に転じるという変化を毎年繰り返してきた。図は、ホクレンが開催する家畜市場における乳用初妊牛の月間平均価格の推移を示している。年によって多少の差はあるものの、50万円前後を最低価格水準として、春産みの出回り時期に上昇するパターンが見られる。

しかし、平成26年の春以降、このパターンに変化が表れてきた。つまり、初妊牛の取引価格の低下が途中で止まり、最低価格水準の上昇（26年は53万円前後、27年は56万円以上）と最低価格水準に停滞する期間の短縮化（26年は7か月、27年は2か月）が見られる。その結果、年間の平均取引価格は一段高い水準を維持するようになった。市場関係者は、その要因を、乳牛資源の減少基調に、夏の暑熱による更新需要と企業的大規模経営の旺盛な増頭・更新需要が重なったからと分析しているが、1月になり春分娩牛の取引が本格化すると各市場で過去最高値を更新している。

また、乳廃牛の市場取引価格にも大きな変化が見られる。同図では、近年における乳廃牛の枝肉価格の推移を示している。乳廃牛の枝肉価格は1kg当たり300円を挟んで上下動を繰り返してきたが、平成25年の夏以降は明らかな上昇傾向に転じ、27年6月に750円台を記録した（図参照）。



資料：ホクレンホームページ、農林水産省「食肉流通統計」

このように乳用牛価格が「別次元」ともいえる、近年経験したことのない高水準で推移する中、酪農経営にどのような変化が表れているのだろうか。平成26年度に実

施した酪農全国基礎調査によると、搾乳牛舎に空きスペースがある酪農家の割合は、全国で52.3%、北海道で38.8%、都府県で60.2%を占めている。経産牛飼養頭数規模別にみると、搾乳牛舎に空きスペースがある酪農家の割合は、小規模層ほど高くなる傾向があり、150頭以上層が31.5%であるのに対して、20頭未満層では70%を超え、5頭以上10頭未満層では75.9%となっている（表参照）。

表 搾乳牛舎に空きスペースのある酪農家の割合

単位：%					
	ある	ない	無回答	計	
全国計	52.3	46.0	1.7	100.0	
北海道	38.8	59.7	1.5	100.0	
都府県	60.2	37.8	2.0	100.0	
経産牛飼養頭数(全国)	5頭未満	75.2	22.0	2.8	100.0
	5～10頭	75.9	21.0	3.1	100.0
	10～20頭	73.2	24.5	2.3	100.0
	20～30頭	68.6	30.0	1.4	100.0
	30～40頭	53.9	45.0	1.1	100.0
	40～50頭	45.5	53.3	1.2	100.0
	50～75頭	36.9	62.2	0.9	100.0
	75～100頭	35.9	63.4	0.7	100.0
	100～150頭	31.7	67.7	0.6	100.0
150頭以上	31.5	68.1	0.4	100.0	

資料：中央酪農会議「平成26年度酪農全国基礎調査」

さらに同調査では、生乳を増産できない理由も尋ねているが、「資金不足で乳牛の更新・増頭ができない」酪農家の占める割合は、全国で17.2%、北海道で13.0%、都府県で19.7%となっている。経産牛飼養頭数規模別にみると、北海道、都府県ともに小規模層ほどこの割合は高くなる傾向が見られる。しかし、市場関係者によると、初妊牛の価格が高水準で推移しているにもかかわらず、メガ・ギガファームと呼ばれる大規模経営の購買意欲は強いという。

以上のことから、乳用初妊牛価格の上昇は、搾乳牛舎に空きスペースのある酪農経営にとって、後継牛を確保できない理由の一つとなっているのではないかと考えられる。また、乳廃牛価格の高騰は、経産牛飼養頭数を減少させる原因となっているのではないかと考えられる。生乳生産量の維持・回復にとって、乳用牛飼養頭数の維持・増加は、経営後継者の確保と並ぶ喫緊の課題となっている。近年における乳用牛価格の高騰は、酪農経営の縮小過程への移行、あるいは廃業を加速させることが懸念される。